



2008 平成20年

9

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市地域活性課へ

発行 ● 狛江市地域活性課 〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5 ☎3430-1111 FAX3430-6870 Email=wacco@city.komae.lg.jp 編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press 〒201-0012 狛江市中和泉 3-2-16 プランツベルツ 201 ☎3430-6617 FAX3430-6743 Email=wacco@k-press.net

怒る多摩川と野川 暮らし襲った濁流

水の脅威

多摩川や野川は狛江に恵みをもたらす一方、流域の人々は長年、水害に苦しんできた。昭和41年には台風4号による大雨で当時市内を流れていた野川の岩戸橋付近の堤防が切れ、約118haが水につかり、床上・床下合わせて1690世帯が浸水するなど大きな被害が出た。49年には台風16号で増水した多摩川の堤防が決壊、民家など19戸が流出、ニュースで放映され大きな衝撃を与えた。野川は改修されて流路が変わり、多摩川の堤防も強化、ハザードマップも作成されたが、水害への備えは怠れない。



濁流に流される家

1974年

堤防が決壊し民家など19戸が次々と多摩川にのみ込まれた



多摩川決壊の碑

2008年

堤防決壊現場付近に立てられた碑



汗だくで働いた消防団員

川合義雄さん(82歳・岩戸南)の話 18歳の時に消防団に入り、いくつもの災害を経験しました。野川のはんらんの時は第五分団の分団長でした。田んぼの土が植えたばかりの稲の苗ごと流出して田の下の「シキ」(岩盤)がむきだしになり、その年は稲作ができませんでした。自宅も床ぎりぎりまで水がきて、家族が米俵を座敷に上げました。私は消防団員として岩戸橋付近へ出動、他の団員と土のうを作って堤防へ運びました。水の勢いが強くてほとんど流されてしまいました。その後、堤防が決壊し危険になったため、水防活動を中止して、避難誘導などにあたりました。水が1週間ぐらい引かず、下水道もなかったため、汚物も流れてきて、後始末に苦労しました。野川は暴れ川で、田んぼや道路が水につかったことはありましたが、これほどの被害は初めてでした。

多摩川堤防の決壊の時は副団長を務めていました。8月31日に川が増水して団員は警戒に出動、9月1日は防災訓練の予定でしたが、中止となりました。水かさが増してきて、堤防を水が洗うようになり、木流し工法や土のう積みなどをしましたが、あっという間に流されてしまい、危険になったので監視だけになりました。安政生まれの大お婆さんから明治23年には、多摩川の堤防が切れて岩戸南、猪方、駒井町などの一帯が水浸しになったと聞いたことがあり、はんらんしたらいへんだと思いました。午後6時に市から避難命令が出て、消防団員は周辺をハンドマイクや大声で叫んで回りました。災害対策本部が解散する10日まで、消防団員は動きづめでした。毎日、出動人員の割り当てがあるので、自営業の人は仕事ができなくて困りました。堤防での水防作業は自衛隊や機動隊が担当し、消防団は後方支援にまわりました。蛇かごや

土のうをいくつ作ったか、数えられないほどです。自衛隊員や機動隊員は蛇かごの作り方を知らなかったため、私たちが指導しました。資材の片付けから弁当の手配までたくさんの仕事をこなしました。堤防を爆破するときの住民への広報も消防団がやりました。残暑が厳しいところで、みんな汗だくで動きました。昔の川の様子などについて詳しい人が市役所にいないため、会議に出席したり、マスコミへの説明などにあたるようになり、現場を離れられませんでした。このため、ふるりに入るため家へ2回帰った以外は、1週間ぐらい車で寝ました。住民は二中と三小、六小に避難しましたが、避難命令を出すのは市長ですが、一級河川の場合、解除は建設大臣(当時)が行うので、なかなか命令が解除されず、消防団員もかなり苦情を言われて、対応に苦労したことを覚えています。「いまでも水はこわい」というのが実感です。



野川はんらん

1966年

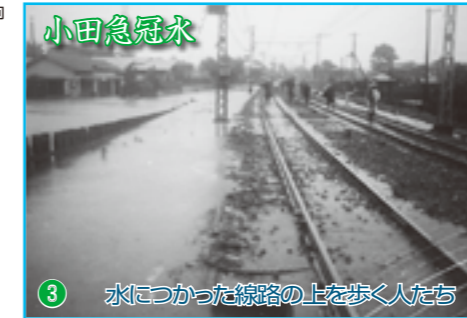
あふれた水につかり湖のようになった狛江

岩戸橋下流は湖のようだった 三角利一さん(79歳・岩戸北)の話 家のそばを野川が流れていて、子どものころから台風の時などはよく水があふれました。「ミツヤの深んど」(駄倉保育園北



野川のはんらんで浸水した箇所

の付近で強い風雨の中で土のうを積んだり、警戒に当たりました。どんどん川の水位が上がって、夕方ついに岩戸橋近くの南側の堤防が10mぐらい切れ、水と土砂が一気に流れ出しました。すごい勢いで銀行町の方向へ向かい、第三小から岩戸八幡神社あたりまで一面水浸しで湖のようでした。小田急線の線路も砂利が流



小田急冠水

水につかった線路の上を歩く人々



狛江通り

道路も川のようになった

れてレールが浮き、電車が止まりました。私たちがもっていることしかできず、団員は住民の避難誘導や炊き出しなどを行いました。自宅には被害がありませんでしたが、橋の近くにあった畑は土砂で埋まり、結局元に戻すのをあきらめ、アパートを建てました。畑が水につかるなど水害には何度も遭っていましたが、決壊は初めてで、こわい思いをしました。



あふれる野川

堤防を乗り越えてあふれ出す水



多摩川堤防決壊

1974年

夜も必死の水防活動が続けられた

目の前で流出したわが家

柏木克己さん(82歳・猪方)の話 昭和35年ごろ、父も私も釣りが趣味で多摩川が近くにあり、静かな環境が気に入って越してきました。多摩川水害の時は、家を建て替えて3年目で、5人家族でした。前年の台風の時堤防の崩れた箇所を補修していたこともあり、1日に避難命令が出て、少しぐらい浸水するのしかたがないかと思いつて三小へ避難しました。テレビのニュースで堤防がえぐり取られる現

場の様子を見て、家が流されると思い、近所の人たちと一緒に機動隊と交渉し家に入って貴重品を持ち出す許可をなんとか取り付けました。許された時間が10数分しかなく、仕事人間で家の中のことがわからず、気も動転していたので、何をもち出してよいかわかりませんでした。とりあえず電話帳とアルバムを取ってきましたが、妻がすごく喜びました。その夜、心配で自宅の様子を見にいくと、中には入れませんでした。消防団の人が庭にあった息子の自転車をもち出してくれました。家が無事だったので少しホッとして戻りましたが、2日の朝もう一度現場へ行きましたが、午前8時ごろに目の前で流されてしまいました。青空の下を流れていくわが家を見て、覚悟はしていましたが、寂しい、くやしい思いをしました。その後も、テレビのニュースでは決まって自宅が流れる姿が映される



避難所

二中は避難した住民であふれた

ので、その度に胸が痛くなります。その後は何度も川へ行って娘のぬいぐるみなどを拾いました。1週間から10日ほど後に、世田谷区砦出張所の職員が河川敷で学生時代からのアルバムを拾い、ていねいに乾かして届けてくれました。すごくうれしかったです。その後も長い間、裁判や二重のローンで苦労しましたが、住民が団結することの大切さを痛感しました。いまでも水害のことを教訓に、貴重品や食料品をすぐ持ち出せるようにしています。川は生きものでこわいと思います。 写真提供・取材協力=川合義雄、三角利一、柏木克己(順不同・敬称略) 資料=「狛江町広報」『多摩川堤防決壊記録』(狛江市)